

2020 年度研究助成 研究実績報告書

代表研究者	宇佐美 しおり
研究テーマ	被災者兼支援者のうつ/PTSD(外傷後ストレス障害)予防介入実践者育成訓練プログラムの開発

<助成研究の要旨>

【目的】

本研究は被災者兼支援者のうつ/PTSD(Post Trauma Stress Disorder 以後、PTSD、心的外傷後ストレス障害)予防介入実践者育成訓練プログラム(以後、実践者育成訓練プログラム)の開発を目的とした。

- 1) 被災者兼支援者のうつ/PTSD 予防介入実践者育成訓練プログラムの内容妥当性について国内外の災害エキスパート 20 名にグループインタビューを行いプログラムの妥当性を検証した。
- 2) そして被災者兼支援者のうつ/PTSD 予防介入実践者育成訓練プログラムを 15~20 名ずつ 6 グループ合計 97 名(介入群)に提供し介入前後、対照群 94 名と知識・スキルで比較しプログラムの有効性を検証した。

【実施方法】

1. 実践者育成訓練プログラムの開発の妥当性の検討: 当研究者はこれまで被災者兼支援者のうつ/PTSD 予防介入プログラムを開発した被災者兼支援者のうつ/PTSD 予防介入は、(1)災害後の各時期に応じたうつ/PTSD のトリアージ、(2)急性期では救急対応集団精神療法と支持的セルフケアプログラム、(3)亜急性期では支持的集団精神療法とセルフケアプログラム、(4)回復期・慢性期には力動的集団精神療法と PAS セルフケアセラピー(PAS-Self-Care therapy、以後 PAS-SCT)が効果があることが検証された。そこで今回この結果と国内外の文献を元に被災者兼支援者のうつ/PTSD 予防介入実践者育成訓練プログラムを作成し評価した。2020 年 4 月~5 月に、作成した実践者育成訓練プログラムの内容妥当性の検討を国内外の災害エキスパート 20 名にグループインタビューを用いて検討を行った。概ね妥当であることが確認された。
2. 実践者育成訓練プログラム内容: 内容は、災害後(1)急性期における①救急対応集団精神療法と②支持的セルフケアプログラム、(2)亜急性期における③支持的集団精神療法と④セルフケアプログラム、(2)回復期・慢性期における⑤力動的集団精神療法と⑥PAS-SCT の内容について講義、事例検討、ロールプレイで構成し、①から⑥を実施した。
3. 実践者育成訓練プログラムの評価: 2020 年 6 月から 2021 年 2 月までの間: 被災者兼支援者に関わり今後人材育成の指導者となる産業保健師、災害拠点病院看護管理者、精神科医、災害・精神看護 CNS、他職種 100 名に対し 20 名ずつ 6 グループをオンラインで実施した。上記①から⑥のそれぞれの内容について介入前後に質問紙を用い、①~⑥に関する知識とスキルの評価を行った。介入前後の質問紙調査への記載は 97 名であった(介入群)。
4. 対照群に対する質問紙調査: 2020 年 12 月-2021 年 1 月に、実践者育成訓練プログラムを受けない対照群 150 名に介入群と同じ質問紙を用い調査を行った。回収率 62.6%で 94 名の回答だった。
5. 分析方法: SPSS VER.27.0 を用い 2 群間・介入群の介入前後の比較を行い、実践者育成訓練プログラムを評価した。分析には正規性の検定後、ノンパラメトリック検定を用い、対象者の特徴には χ^2 検定を、2 群間には Man-Whitney U 検定を、介入前後には Wilcoxon の符号付順位和検定を行った。
6. 研究の倫理的配慮: 研究者所属の倫理委員会で承認を得た後(2020 倫第 1-2 号)、対象者に研究の目的、研究方法、研究参加の利益・不利益、自由意思での参加、学会での発表について伝え同意を得た。対照群には文書で研究依頼を行った。

【研究成果】

今回 2 群間の対象者の特性は異なっていたが、介入群と対照群の看護実践能力には差はなかった。しかし介入群の介入前後の比較より実践者育成訓練プログラムの効果がみられていた。すなわち急性期における支持的セルフケアプログラムや救急対応集団精神療法、亜急性期におけるセルフケアプログラム、回復期・慢性期における PAS-SCT については介入効果がみられていた。しかし亜急性期における支持的集団精神療法、回復期と慢性期における力動的集団精神療法は介入前後に差がみられず、集団への介入には課題が残されていた。今後被災者兼支援者のうつ/PTSD 予防介入実践者育成プログラムを修正するとともに、今回の対象者が災害現場でどのように活躍できるのか、追跡調査が必要であると考えられた。